

**授業づくり研修 ー道徳の授業・評価についてー**

第2回の5年経験者研修は、初任者研修においてもご講義いただいた四天王寺大学の杉中康平先生を講師に迎え、『考え、議論する』道徳科の推進 ～『主体的・対話的で深い学び』につなげる道徳科の授業～』というテーマで研修を行いました。

平成30年度(2018年度)から小学校、昨年度から中学校において道徳科が全面実施されました。講義では授業づくりのポイントについて詳しく説明していただきました。後半には、小学校班は「友のしょうぞう画」、中学校班は「いつものバイオリン」を使って、講義の内容を踏まえながら、指導案を考えるワークを行いました。

**～ ふり返りシートより～**

道徳と国語の違いが、国語は教材を詳しく読解していくのに対して、道徳は生き方を問うということに関して本当にそうだと感じた。国語の物語教材では、主人公の気持ちに迫っていくことで、自分なりのテーマを探すが、道徳では考えるべきテーマがあり、そのテーマを深めるために教材を利用するというのが主である。しかし、私たちはついつい物語の筋をしっかりとおさえようと長々と説明してしまうことがあるので注意しなければならない。物語の大筋をさっとおさえ、シンプルな発問をすることで、子どもが自分で考えたり、友だちと考えたりする時間をより増やしていかなければならない。その中で、今回の講義に会った「同じ発問はしない」「心の扉を開ける発問と扉から中へ入っていく発問をする」ということを意識することが大事だと感じた。

今までの自分の授業を振り返ると、答えが同じような発問をしていたり、これからどうしたいかというような振り返りを書かせて子どもたちが決意表明をするような場になっていた授業もあつたり、反省するところがたくさんあると感じました。発問を考えていく時、「心の扉を開ける発問」と「扉から中へ入っていく発問」を考えたり、発問を絞ったりすること等、もっと意識しなければいけないと思いました。自分の教材研究の甘さを実感すると同時に、教材研究の仕方、授業づくりの仕方を振り返るいい機会になりました。

道徳の評価については研修内でもあったように、子どもたちがすでに「答え」を知っているため、子どもたちから「建前」が出やすくなってしまふということが気になっていました。めあてそのものを「評価の発問」で問い直す方法は校内の研究授業等からも学び、実際にその後、授業で取り入れました。すると、授業前と後では道徳的価値に対する考え方が深まったように感じました。これからもこの方法を取り入れ、板書も工夫しながら子どもたち自身が一時間の授業の中で道徳的価値が変化したこと、再確認したことを感じられるように教材研究をしていきたいと思いました。

今回の研修では自分のこれまでの授業を振り返りながら動画を見ていました。いざ授業をすると、授業を進めていくことに必死になってしまい、道徳に大切な「気づき」のチャンスを逃していると思いました。また、最後におっしゃっていた「道徳を切り口にして生徒指導や学級経営の基本が学べる」ということについてですが、確かに道徳の授業が上手な先生は、生徒指導や子どもとの関係づくりが上手だと感じます。

「どの子ども心の中により良く生きようとする種を宿している」という杉中先生の話から、子どもたちが道徳的な気づきができるよう指導に当たりたいと思いました。また、道徳を要として、他教科でも今回学んだ授業づくりを活かしたいと思いました。そして、授業をより良くしていくことで、子どもたちと教師の関係、子ども同士の関係、学校づくりなど集団の力が育つようにしたいと思いました。

ある受講者の方の感想です。「今回の研修を受けて、初任者研修で杉中先生に教えていただいたことを思い出しました。普段の授業で意識していたつもりになっていたことも、今回の講義を受けたことで改めて思い返し、学びなおすことができました。」5年という経験があるからこそ初任研の時よりもたくさんの気づきがあったと思います。杉中先生のお話がこれまでの実践と結びつき、実感を伴って理解を深める、学び多き研修となったのではないのでしょうか。